平成30年度 宜野座村学力向上推進委員会 家庭教育部会主催

教育講演会「なぜ、少年院で人生が変わるのか？」

去る7月4日（水）、宜野座村文化センター がらまんホールにおいて、平成30年度 宜野座村学力向上推進員会 家庭教育部会主催、「日本こどもみらい支援機構」 武藤杜夫 氏を講師として、「なぜ、少年院で人生が変わるか？」と題して、教育講演会が開催されました。

武藤氏は、長年沖縄少年院の法務教官として非行少年の更生に携わり、2017年に辞職した後、少年院の卒業生らと「日本こどもみらい支援機構」を設立し、代表に就任すると沖縄各地で講演活動、執筆活動に積極的に取り組んでおり、その活動の場は、全国へと広がっています。

写真３ 教育講演会の様子

講演会の冒頭、「姿勢を正してください」という言葉から始まりました。それは、日常の少年院で話されることの一コマでした。

「今日は少年院という世界で子ども達とどんな関わりをしてきたのか、その少年院をどうして辞めることになったのか、これからどんな方向に向かっているのかということを話したいと思います。」と、続けたのです。

「少年院は、非行を犯した未成年が家庭裁判所で少年審判を受け、裁判官から少年院送致を宣告された少年を収容し、その少年に社会で再非行させないようにするため、矯正教育を施す国立の施設です。そこで働いているのが法務教官という職業の人間でその仕事は、教師に心理カウンセラーと警察官を足して、３で割っていただけるとイメージできると思います。少年院というと、江戸時代の牢屋みたいな所にぎゅうぎゅうと押し込められているというイメージをもっている方もいるのですが、現代の少年院は近代化された施設で、一人を少年院に１年間入れると約２０００万かかります。沖縄尚学校の中学校の学費と寮費で１１０万です。そのお金をかけて少年院がやっているなかみは、生活指導（あいさつ、掃除、時間守る、人の話を聞く）、職業指導（資格取得等）、教科指導、体力指導、この根底にあるものが法務教官と子ども達の魂の交流です。一つ屋根の笑ったり、おこったり、泣いたり、落ち込んだり、励まし合ったりしながら、自分の全人格を武器にして、「子ども達の魂を感化していきます。」と言ってムービーを流しました。

そこには、６月23日慰霊の日に子ども達と関わった内容が文字として描かれていました。「一人の命は、お父さんとお母さんと二人から生まれ、そのお父さんお母さんにもお父さんとお母さんがいる・・・・・それをひもといていくと、400年前には何人になるか計算すると、13万1072人になます。1600年代の沖縄の人口は約10万人。すると、すべてが祖先だということになります。その祖先の一人でもかけていたら、君たちは生まれてこなかった。飢饉で苦しくても雑草を口に入れ、泥水を流し込み一つの命をつないだだ、死ぬことを選ばず絶望と孤独と戦いながらも一つの命をつないだ。戦世にも我が子を抱いて鉄の雨の中を歩き、真っ暗闇の洞窟の中でも一つの命をつないだ。そんな祖先に一つの言葉をかけるとしたら？」と問うと子どもは『生きていてくれて、ありがとうございます。』と言いたい。」と答えた。

「そうだね。きっとぼくも同じ言葉をかけるよ。祖先は、おまえ達にどんな言葉をかけると思う。きっと『生きろ』辛いとき、自分の存在を必要とされないときでも、命のリレーをつなぐことを最優先してほしい。『生きろ』すべての命を肯定することから始めるのです。自己肯定が他者肯定へとつながるのです。

命を百億で売ってくださいといっても、だれも売ってくれないですよね。僕達は一人一人が世界中の宝物を集めても買えない『命』という宝物をもって生まれてくるのです。だから、一人ももれなく生まれながらの成功者だというのです。『成功』というのは気づくことです。気づいて感謝できることが本当の成功者というものなのです。非行とか犯罪と言われるものは、人間の命の価値が分からないから起こることなのです。だから子ども達に命の価値を教えることが大人としての責任なのです。教える立場の大人が命の大切さをしらないから、子どもも知らずにいるのです。

ある子が『自殺したらだめですか？』と問うた、僕は『だめだ。』の3文字で答えた。すると、『自分の命をどうしたって自由じゃないですか。』と、言った。周りの子に聞いた『Aさんが、自殺しようとしたら、どうする？』みんなは、『止める』と答えた。『世の中のすべてのものを理屈だけで判断できると思うなよ。だめなものは、だめだ。」人間は、大人も子どもも『こどく』という『どく』が回ると死んでしまうのです。「いじめ」は人間をひとりぼっちにする最大の暴力だと思います。大人社会のいじめがなおらないと子どものいじめはなくならない。この国は「表現の自由」のなのもとに、いじめを容認しているのです。いじめを見て見ぬふりしている大人がいませんか。子ども達はその大人の背中をみているのです。「大人が変われば子どもが変わる。世の中からひとりぼっちをなくしましょう。」

そして、もう一つムービーを流しました。そこには、武藤さんと子ども達の未来が語られていました。「周囲とちがった個性のある君たちは将来、大物になる。この中から社長や議員がでる。世の中を大きく変える人になる。人の痛みを知っている君たちは、傷ついている人達や困っている人に手を差しのべられる人になる。今の姿だけを見て自分の価値を決めるな。君たちは世の中のたくさんの人を幸せにできるはずだ。僕は、未来からきたんだ。幸せになる人々からたくされ、未来からきたんだ。」

「壁にぶち当たったとき、ぼくは法務官の役割って何だと考えました。『子どもの可能性を信じること』だと思います。この子達に向き合うと、同世代の子ども達にはない個性的な発想力、思いついたことすぐ行動に移す実行力、始めたことは人から怒られようが殴られようが絶対やめない継続力、非行少年特有のこういう性質がすべて大物になる条件です。一度、人生のどん底につきおとされ這い上がってきたこの子達は、勝負強く、何よりもどん底で苦しんだ人の気持ちの分かるすばらしい人に成長している。だから、少年院に入ってきた子に、『おまえには一流になる資質がある、一流になれ、一流になっておまえのことを笑った大人や同級生を見返してやれ』と言って、子ども達の才能を花咲かせる関わりを続けるのです。」

「『信じる』という字が好きです。人に言うと書きます。人が言葉をかける。言葉をかけるから信じることになるのです。最大の非行少年「武藤杜夫」が、失敗を繰り返しながら成長していくことを一番身近で見ていたから信じられるのです。子どもを変えることはできません。少年院で僕が変えてきたものは、僕自身かもしれません。できないいいわけを一生懸命考えている自分から、どうやったらできるのかを考えている自分に変わる。子どもは変わらないとあきらめている自分から、子どもの可能性を信じる自分に変わる挑戦を続けたきただけです。少年院に人生が変わったのは、わたし自身の人生だったのです。としめくくりました。

とても印象にのこる、講演会でした。たくさんの方に参加していただき、ありがとうございました。